なるほど！うみはく

海の博物館で海女に出逢う

市立海の博物館 ☎㉜6006

海の博物館には、海女文化に関する展示がたくさんあります。

白浜遺跡の出土物や国崎と伊勢神宮のつながりに見られる「海女の歴史」、菅島のしろんご祭、国崎の御潜（みかつき）神事などの「海女の祭り」、そしてイソノミ、水中メガネ、オモリといった「海女の道具」などについて、実物資料、解説パネル、写真や映像を使って紹介しています。

また、アワビ類、サザエ、ナマコ、海藻類などの漁獲物や海女漁の決まり（捕ってはいけない大きさ、禁漁の期間）などの展示を通じて、海女が培ってきた自然と共生する持続可能な営みについて知ることもできます。

昨年度には、子どもたちが実物資料と対比しながら学べるような木製パズルも新たに展示に加わりました。海の博物館が多くの人々、特に若い世代が海女文化に出逢う場所となればと思います。

8月5日には、「みえのうみ通信社《海女》と学ぶみえの海」と題し、三重テレビが公募したこども記者（三重県在住の小学5・6年生）20人が来館して、海女について取材し、その気付きを情報発信しました。

また、この夏、鳥羽高校の生徒が海女のことを広く知ってもらおうと海女展示のガイド練習を始めました。8月10日には、小学生向けに「海女の自由研究応援企画」を実施し、鳥羽高生のガイドと三重大学の学生らによるポイント整理も交え、小学生が海女文化を学びました。

鳥羽高校とばっこくらぶによる海女展示のガイド案内

今秋は、市内の小学5年生が「海女」をテーマに郷土学習に取り組む予定です。その集大成となる「とばっこ検定」を、博物館展示を見学しながらのウォークラリー形式で実施するため、現在準備を進めています。

これからもみなさんに海女文化の魅力を伝えていきます。

今月は、海女が採るテングサを使ってトコロテン作り企画を実施します。テングサを煮出して原液を作り、デザートやおかずにもなるメニューを3～4品作りますので、ぜひ参加してください。

とき　9月8日(日)
午前11時～午後2時

定員　15人程度
※事前申込必要

参加料　大人1300円
小学生以上1000円
※共に入館料込み

持ち物　エプロン

自由研究応援企画で三重大学の学生らが小学生に助言

鳥羽・海藻文化革命

岩尾博士の海藻博物記

vol.9

～サガラメ(アラメ)の話～

水産研究所 ☎㉕3316

広報とば平成30年11月1日号で取り上げたサガラメ（アラメ）について再び紹介する。

コンブ科の海藻であるサガラメやカジメはとても重要な海藻である。海中林という密な群落を形成するからだ。

海中林は、森林と同じように炭素や窒素などの物質循環の中で重要な役割を果たし、多くの海洋動植物が暮らす。

アワビなどにとっては、そのちぎれた葉は極上の餌になっている。この海中林は近年、急激に減少しており、紀伊半島でも南部の方から少なくなっていて、志摩市西部などでも失われ始めている。また、愛知県でもかなりの面積の海中林が無くなっている。つまり、現在伊勢湾周辺で比較的健全な海中林が残されているのは、志摩市の大王町周辺と、この鳥羽市海域くらいなのである。鳥羽市海域であっても、小浜や佐田浜、三ツ島周辺、答志島北東部、坂手島全域では、すでにサガラメを見ることはできないと11月号では伝えた。

ここからが今回の本題。なんと、サガラメを見ることができなくなっていた坂手島で3本ほど、2歳くらいのサガラメが生えていることが判明した。2歳というと、場合によっては遊走子（運動性のある胞子）を放出し、子孫を残す可能性がある。もちろん、今後も見守るわけだが、水産研究所で生産しているサガラメの種苗をいくつか設置してみた。5月に設置して、7月時点ではまだ残っていた。自然の増殖に任せたいという気持ちもあったのだが、それを少し手伝えないかと考えたわけである。今後が楽しみだ。

坂手島で発見した天然のサガラメ

坂手島の天然サガラメの近くに設置した、石に取り付けた種苗